

不定詞を受ける *le* と *ça* をめぐる一考察

— *aimer* と *vouloir* の場合 —

山 本 香 理

0. はじめに

不定詞を直接目的補語として代名詞化する場合は、一般に *le* または *ça* を用いるとされている。*le* と *ça* のあいだの選択に関しては、どちらも使用できる動詞がある一方で、どちらかに偏りが見られる動詞もある。先行研究のなかで、そうした代名詞の選択の偏りはしばしば指摘されている。しかしそれが何によるものかという点に関しては十分に明らかにされていない。このことから、そのような代名詞の選択の偏りの要因について、より詳細な記述を試みる価値はあるものと思われる。その一環として、本稿では *aimer* と *vouloir* の不定詞の代名詞化を考察する。このふたつの動詞は広義の心理動詞であり、統語的に共通点がある。しかし使用実態を観察すると、不定詞を代名詞化する場合、(01)⁽¹⁾のように *aimer* は *ça* を、*vouloir* は *le* を用いる傾向があることが分かる⁽²⁾。

(01) – Et puis les situations ne sont pas symétriques. Tu as un copain,
je suis seul.

– a. C'est que tu **l'aimes* / ^{ok}*aimes ça*.

b. C'est que tu *le veux* / *?veux ça*.

本稿の目的は、このような統語的差異が何に由来するか、その要因を用例の分析⁽³⁾にもとづいて明らかにすることである。そのために第一章では、*aimer* と *vouloir* の直接目的補語が名詞句である場合、代名詞化する際にどの代名詞

が選択されるかを考察する。また同時に **le** と **ça** の指示機能も概観する。次の第二章では *aimer* と *vouloir* の事行対象となる不定詞の表す事行の特性を検討する。

また議論が煩雑になるのを避けるためここでは考察の対象を *aimer, vouloir* の直説法のみとする⁽⁴⁾。

1. 名詞句の場合

不定詞を代名詞化する場合にどの代名詞を選択するかに関して、名詞句を代名詞化する場合に選択される代名詞が判断の基準となると一般的にいわれている。ここでは *aimer* と *vouloir* の事行対象が名詞句で表現される場合の代名詞化について **le**⁽⁵⁾ と **ça** を中心に考察する⁽⁶⁾。その際、*aimer* と *vouloir* がどの代名詞と用いられるかを明らかにすると共に、我々にとっての **le** と **ça** の指示機能の枠組みも示してみたい。

用例の観察から *aimer* に関しては **le** と **ça** はほぼ均等な割合で使用され、*vouloir* は **ça** を用いる頻度は **le** と比べるとはるかに少ないことが確認できる。*vouloir* で **ça** を用いる例として確認できたのは次のような、**ça** が発話状況にある対象を直接に指し示す、いわゆる直示的用法の **ça** の用例のみであった。

(02) (目の前にあるヴァイオリンを見ながら)

J'ai toujours voulu ça, alors Dites-moi, il ne faut pas que j'achète un violon, là, bientôt?

(TRUFFAUT, F. 1979, *L'amour en fuite*)

次に発話者が指示対象をどのように捉えているかという点に着目しながら **le** と **ça** の指示機能を考える。

発話者が **le** を使用する場合、その指示対象はいつも発話文脈から個別化されている。(03) のように先行詞の名詞が不定冠詞に先立たれていても、**les**

livres que j'aime, les livres que je lui prête のように発話者はいつも個別の対象を想起している。また (04) のように先行文脈で **la** の指示対象が言語化されていない場合でも **la** は使用可能である。ここでは **la** の指示対象が発話状況に存在する例である。しかし **la** の指示対象が発話状況に存在することが **la** の使用を可能にしているのではない。最初のト書き *Il a son regard fixé sur la chevalière au doigt de Mathilde. Elle s'en aperçoit* から確認できるように、**la** の指示対象 **la chevalière au doigt de Mathilde** が話題の中心であることがわかる。(04) では、発話状況から個別化された指示対象を **la** が受けている。

(03) **Je lui prête des livres que j'aime. Elle ne les aime pas.**

(TRUFFAUT, F. 1971, *Les deux Anglaises et le continent*)

(04) *Il a son regard fixé sur la chevalière au doigt de Mathilde. Elle s'en aperçoit.*

Mathilde : **Je peux vous la laisser . . .**

Le «Docteur» ne dit rien. Il attend.

Mathilde : **Vous la voulez?**

(JACQUOT, B. 1997, *Le septième ciel*)

総称解釈がなされる名詞句を受ける場合 **ça** が用いられることはよく知られているが、**le** で受けることも可能である。*vouloir* は (05) のように総称名詞句の場合も **le** で受ける。一方 *aimer* に関しては (06) のように **le** で受けることも可能であるが、朝倉(1981)が指摘するように⁽⁷⁾、総称名詞句は **ça** で受ける傾向にある。(07) がその例である。

(05) **Ma fille, pour trouver le grand amour, il faut le vouloir. Je ne crois pas que tu sois réellement à sa recherche.**

(DUCASTEL, O et MARTINEAU, J. 1997, *Jeanne et le garçon formidable*)

(06) **Roland : Je ne crois pas qu'il soit nécessaire de faire des enfants.**

Lola : **Tu ne les aimes pas?**

(DEMY, J. 1961, *Lola*)

(07) **Tu aimes ça, les citrons?**

(Tournier, Coq, 163 in 朝倉 : 56)

また、朝倉 (1981) で総称名詞句に関する記述で **le** と **ça** の使い分けについて興味深い指摘がある。(08) の引用で述べられるように名詞句を限定する表現が加わることで **le** の使用が可能になることがある。

(08) **Moi, le café au lait, je l'aime très noir.** (. . .) **le café au lait** を **le** で代表するのは属詞 **très noir** の添加によるものと考えられる。(…) **Le lait, je déteste ça** としかいわないフランス人に **le** を **ça** に換えた発話 **Moi, le café au lait, j'aime ça très noir** を示すと、そうとも言うが、l'のほうがもっと普通だと答えた。

(De vive voix, 73 in 朝倉 1981 : 57)

(09) では、**ça** は食べ物としての **le poisson cru** の表すクラス全体を受けている。しかし次に登場する代名詞 **ils, les** は名詞 **poisson** が表すクラス全体を受けているのではなく実際に料理された魚といった具体的な対象を受けている。

(09) **Vous aimez vraiment ça, le poisson cru? Je préfère les mets qui me font oublier qu'ils étaient vivants juste avant que je les regarde.**

(LEVY, M. 2004, *La prochaine fois*)

このように具体的な次元で対象を捉える場合の **le** の使用は総称名詞句に固有の問題ではない。次の (10), (11) では都市名が問題になっている。都市名は一般的に代名詞化が難しいとされ (10) のように何も表示しないのが普通である。しかし (11) では **lorsque tu y es avec moi** が加わることで先行詞の **Rome** を **la** で照応することが可能になる。

(10) **Je ne connaissais pas Paris, alors j'ai visité. Je n'ai d'ailleurs pas tellement aimé.**

(F. Corblin, 1985 cité par G. Kleiber 1994 : 22)

(11) — **A Rome, nous serons libres ; il faudra bien que je sois chez Scabelli à neuf heures et j'ai fait la sottise d'accepter un rendez-vous**

pour déjeuner, mais, à partir de six heures, j'aurai la paix ; je viendrai t'attendre piazza Farnese.

— **A Rome . . .**

— **Comme si tu n'aimais pas Rome!**

— **Je l'aime surtout lorsque tu y es avec moi.**

(BUTOR, M. 1957, *La Modification*)

以上のことから、名詞句を代名詞化する場合、名詞の表すクラス全体を問題にする場合は **ça** を使用する。一方、ある具体的な性質を想起しながら名詞の表す対象を問題とする場合は **le** を使用する。

aimer は発話者が指示対象を個別または総体として捉えるかに応じて、**le**, **ça** が選択される。一方 *vouloir* はどちらの場合も **le** を選択する。総称解釈がなされる場合においても **ça** ではなく **le** が選択される。

この章の冒頭で述べたように、不定詞を代名詞化する場合にどの代名詞を選択するかは名詞句を代名詞化する場合に選択する代名詞が判断の基準となる。名詞句、不定詞どちらの場合も **le** が選択される *vouloir* に関しては、この定説は受け入れることができる。しかし *aimer* に関しては定説と合致しない。名詞句を代名詞化する場合 **le** と **ça** どちらも使用できる。しかし、本稿の導入部で述べたように、不定詞を代名詞化する場合は **ça** が選択されるのである。

次の第二章では *aimer* と *vouloir* が対象とする不定詞が表す事行の特性を比較対照し、以上のような代名詞の選択の偏りが生じる要因を明らかにする。

2. 不定詞の場合

まず *aimer*, *vouloir* と共起する事行、共起しない事行の特性を明らかにする。次に同じ不定詞が対象になる場合、*aimer*, *vouloir* と共に用いることで生じる解釈の違いを明らかにする。

2. 1. 事行の共起関係

用例の観察から *aimer* は繰り返し可能な事行と共起するが、一度しか生起しない事行との共起は難しいことが確認できる。

例えば *mourir* である。*mourir* の表す事行を再び繰り返すことは不可能であることから次の発話は容認されない。

(12)* **J'aime mourir.**

一度しか生起しない事行はその事行対象も問題となる。(13), (14) で示す不定詞の事行対象が個別の人・事物である場合、その事行対象に再び同じ事行を行うことが出来ない。このことから事行は繰り返し不可能となり、*aimer* と共起しない。

(13 a) では一度建てた個別の家を再び建てることは物理的に不可能である。(13 b) は過去に起こった個別の出来事について知ることは一度しか行うことができない。(14) では同じ個人と複数回結婚することは一般的に不可能である。

(13) a.* **J'aime construire la maison.**

b.* **Je ne souhaite pas rouvrir vos blessures mais j'aime savoir comment vous avez vécu la journée du 29 juin 1992, jour de l'assassinat du président.**

(14)* **J'aime me marier avec Patricia.**

ところで上で挙げた不定詞の事行対象が個別の人・事物を表さない場合は容認される。不特定または総称の価値を担う場合は、事行対象が同一の個体を表さないことから事行の繰り返し可能となり *aimer* と共に用いることができる。

(15 a), は不特定の家を建てることは繰り返し可能である。(15 b) は映画監督が述べたもので、自分の作った作品に対して人々がどう反応するかを知ることが複数回行うことができる。(16) では不特定の美しい女性、または美しい女性一般と結婚することは、何度も行うことができる。

(15) a. **J'aime construire une maison.**

b. **Par tempérament, j'aime savoir comment les gens réagissent au film.**

(LM 1998/09)

(16) **J'aime me marier avec une belle femme / de belles femmes.**

また (17), (18) のように直接目的補語を表示しない、いわゆる他動詞の絶対用法で用いられる動詞も *aimer* と共起可能である。他動詞の絶対用法とは事行主体と事行を焦点とするもので、発話時点において発話者はいかなる事行対象も想起していない。事行対象を表示するとすれば、(15), (16) のように不特定、総称的な人・事物となる。このことから (15), (16) と同様に、事行は繰り返し可能で *aimer* と共に用いることができる。

(17) **Il serrait son verre dans sa main, le verre se casse.**

Excuse-moi, mon vieux. J'aime casser.

(ANOUILH, J. 1950, *La Répétition ou l'Amour Puni*)

(18) **Les gens sont cruels. Ils aiment tuer.**

(KRISTOF, A. 1986, *Le Grand Cahier*)

2. 2. 事行の解釈

上で *aimer* は繰り返し可能な事行と共起すると述べた。そこで (19) では *aimer* と共に用いると *le Tour de France* は毎年開催される *le Tour de France* の総体として捉えられる。例えば過去に何度も大会に出場し優勝した選手が (19 a) のように発言するのは全く自然である。一方 *vouloir* の発話では、*le Tour de France* は、「これから参加する今年の大会」といった個別の大会を問題にしている。

(19) a. **J'aime gagner le Tour de France.**

b. **Je veux gagner le Tour de France.**

つぎに (20) のような不定詞の事行対象が指示形容詞を伴う名詞句で表される場合に着目してみたい。

指示形容詞を伴う名詞句は、「発話状況にある個別の対象」として解釈される他に、その名詞句が表す対象の「タイプ」として解釈されることがある。*aimer* と共に用いる場合の「指示形容詞＋名詞」の解釈は、上で考察してきたように総体として捉えることから「タイプ」と解釈され、(20)のように“**ce genre de**＋名詞”で書き換えることができる。例えば(20)ではある建築士がかつて間取りの素晴らしい家を建てた経験があって、その家のパンフレットを見ながらこの種の家を建てるのが気に入っていると述べる文脈が考えられる。

(20) **J'aime construire cette maison.** ≡ **J'aime construire ce genre de maisons.**

また「指示形容詞＋名詞」が「発話状況にある個別の対象」として解釈されることがある。しかしこのような解釈が成立するのは事行が展開中の場合のみに限られる。

例えば(21)は建築士が家を建てながら、この家は立地条件がいいので、この家を建てるのが好きなのだという文脈が考えられる。

(21) **J'aime construire cette maison parce qu'elle est bien située.**

このように事行が展開中であるとして、幅をもって捉えられる場合、不定詞の事行対象が個別の対象であっても *aimer* と共起可能になる。

vouloir も「タイプ」, 「発話状況にある個別の対象」両方の解釈が可能である。

(22) **Je veux construire cette maison.**

≡ **Je veux construire ce genre de maisons.**

≡ **Je veux construire cette maison-là/-ci.**

「タイプ」と解釈される場合、*aimer* のように不定詞の表す事行を経験していなければならないという制約はない。(22)は、経験はないがこれから建てるものとしてこういった類の家が建てたいと述べることが可能である。

「発話状況にある個別の対象」として解釈される場合、不定詞が表す事行が

発話時点で展開中である場合は **vouloir** と用いることは出来ない。というのも、**vouloir** はある事行を発話時点以降に行う意欲・欲求があることを表すからである。

発話時点以降に行うことは、**vouloir** は次の (23), (24) で見られるように、発話時点以降に、不定詞の表す事行を行う時点を具体的に位置づける時間表現と共起可能であるという事実からも認めることができる。さらに (25), (26) のように、不定詞の事行対象に数量表現を加えることができることから **vouloir** を使用する際、発話者が具体的な次元で対象の事行を捉えていることが確認できる。

(23) Frankie : J'ai une soeur? Chicago, dans l'Illinois, qui a quatorze ans aussi. Elle te ressemble.

Cécile : Elle parle français?

Frankie : a.* Elle apprend. *Plus tard*, elle **aime** être professeur.

b. Elle apprend. *Plus tard*, elle **veut** être professeur.

(DEMY, J. 1961, *Lola*)

(24) a.* Et sans doute, tu **n'aimes pas** avoir d'enfants *avant deux ou trois ans d'ici?*

b. Et sans doute, tu **ne veux pas** avoir d'enfants *avant deux ou trois ans d'ici?*

(DECOIN, H. 1952, *La vérité sur Bébé Donge*)

(25) a.* J'**aime** écrire *deux romans*.

b. Je **veux** écrire *deux romans*.

(26) a.* J'ai 32 ans et j'**aime** avoir *encore deux enfants*.

b. J'ai 32 ans et je **veux** avoir *encore deux enfants*.

上で述べたことをまとめると次の表のようになる。

(27)

	繰り返し	一度限り	タイプ	発話状況にある個別の対象	時間・数量表現
<i>aimer</i>	+	-	+(経験あり)	+(事行が展開中)	-
<i>vouloir</i>	+	+	+(経験なし)	+(発話時点以降)	+

以上の分析から *aimer* と *vouloir* が対象とする事行の特性を次のよう考えることができる。*aimer* は繰り返し可能, または幅を持って捉えることができる事行と共起する。つまり *aimer* は対象の事行を総体的に捉えるものであると考えられる。一方 *vouloir* は, 一度しか生起しない事行とも共起可能であり, 不定詞の表す事行に具体的な時間表現, 数量表現を加えることができる事実から, 対象の事行を具体的な次元で個別的に捉えるものであると考えられる。

3. おわりに

本稿ではまず名詞句を先行詞とする場合を考察することで, **le** と **ça** の指示機能を概観した。発話者がある性質を想起しつつ, 具体的な次元で対象を捉えている場合は **le** で受け, 総体的に対象を捉えている場合は **ça** で受ける。そして *aimer* は **le** と **ça** どちらも選択することが可能で, 一方 *vouloir* は **le** が選択することが確認された。

ところが *aimer* は不定詞を受ける場合 **ça** のみが選択され, 不定詞を代名詞化にする場合にどの代名詞を選択するかは名詞句の代名詞化する場合に選択される代名詞が判断の基準となるという定説と合致しないのである。そこで, 我々は次に *aimer* と *vouloir* と共起する事行, 共起しない事行の特性を明らかにし, ふたつの動詞の事行対象の捉え方を考察した。

aimer は繰り返し可能, 幅をもって捉えることのできる事行とのみ共起する。一方 *vouloir* は一度きりしか生起しない事行とも共起可能である。

また共通した不定詞を対象とする場合でも両者の事行対象の捉え方が反映し

ていることが確認できた。*aimer* と用いる場合、不定詞の表す事行は繰り返して行われる、または展開中のものとして解釈される。*aimer* は対象を「個」として捉えるのではなく、「総体」として捉えるのである。一方 *vouloir* に関しては、不定詞の表す事行はこれから行うものとして解釈される。そして事行を行う時点を示す時間表現やその事行対象に数量表現を加えることができることから、*vouloir* は対象を「個別」として捉える。

以上のことから、不定詞を代名詞化する場合、*aimer* は総体的に対象を捉える場合に用いる **ça**、*vouloir* は個別的に対象を捉える場合に用いる **le** が選択されるのである。

注

- (1) 出典を示していない発話例は、インフォーマントの協力を得てわれわれが作成したもの。インフォーマントはフランス人3人。
- (2) 代名詞化せずになにも表示しないことがあるが、この代名詞非表示については今回考察の対象としない。
- (3) 西村牧夫先生（西南学院大学）が作成されたデータ（映画、演劇のシナリオ、小説）、*Le Monde 1998* を使用。略号 LM は *Le Monde*。
- (4) *aimer* を条件法を用いる場合、Noailly, M. (1998) が指摘するように不定詞を代名詞化する際に **le** の使用が可能になることがある。また条件法で用いると *aimer* が直説法現在形で用いる際に共起しない事行（詳細は第二章以降で扱う）とも共起可能になる場合があることから、今回は考察の対象としない。

(a) On me propose d'aller à Rome. ?Je l'*aimerais*.

(NOAILLY, M 1998 : 134)

(b) Tu *aimerais* avoir un enfant un jour, toi?

(ROHMER, E. 1999, *Les nuits de la pleine lune*)

- (5) **le, la, les** を代表して **le** と表記する。
- (6) 先行詞が〈部分冠詞 **du, de la**, 不定冠詞 **des**+名詞〉, 否定文の〈**de**+名詞〉である場合 **en** で照応するが、本稿のテーマから外れるため詳しく論じない。
- (7) 事実、若いフランス人は、ことに *aimer, adorer, détester, préférer* の直接目的語となる総称名詞の代理語に **le, la, les** を用いることを嫌い、**ça** のほうを好む。

(朝倉 1981 : 55)

主要参考文献

- BLANCHE-BENVENISTE, C. et alii (1984) : *Pronom et syntaxe L'approche pronominale et son application au français*, Paris, SELAF.
- BORILLO, A. (1987) : "Notion de «MASSIF» et «COMPTABLE» dans la mesure temporelle", in *Termes Massifs et termes comptables*, ed. J. DAVID et G. KLEIBER, KLINCKSIECK, pp. 215-238.
- DUBOIS, J. (1997) : *Les verbes français*, Larousse.
- FÓNAGY, I. (1985) : "JA'IME □ JE CONNAIS □ Verbes transitifs à objet latent" *Revue Romane* 20 1.
- GALMICHE, M. (1985) : "Phrase, syntagme et articles génériques", *Langages*, 79, pp. 2-39.
- (1987) : "Massif/Comptable : de l'un à l'autre et inversement" in *Termes Massifs et termes comptables*, ed. J. DAVID et G. KLEIBER, KLINCKSIECK, pp. 63-77.
- GREVISSE, M. (1986) : *le bon usage Grammaire Française*, DUCLOT.
- GROSS, M. (1968) : *Grammaire transformationnelle du français : syntaxe du verbe*, Paris, Larousse.
- GROSS, M. (1981) : "Les bases empiriques de la notion de prédicat sémantique", *Langages* 63, pp. 7-52.
- KLEIBER, G. (1987) : *Du côté de la référence verbale Les phrases habituelles*, PETER LANG.
- LE GOFFIC, P. (1998) : *Grammaire de la Phrase Française*, HACHETTE.
- LE QUERLER, N. (2001) : "Le pronom clitique *le* est-il toujours d'un emploi libre dans le système comparatif du français?", *Clitique et Cliticisation*, Paris Honoré Champion Éditeur, pp. 177-190.
- NOAILLY, M. (1998) : "Emploi absolu, anaphore zéro et transitivité", in *La transitivité*, Actes du colloque de Lille : La transitivité, novembre 1995, éd. A. ROUSSEAU, Presses Universitaires du Septentrion, pp. 131-144.
- TASMOWSKI-DE RYCK, L. (1992) : "Le verbe transitif sans complément", *Travaux de linguistique et philologie*, 30, pp. 157-170.
- TOGEBY, K. (1982) : *Grammaire française*, Akademisk Forlag.
- YAGUELLO, M. (2003) : *Le Grand Livre de la Langue française*, SEUIL.
- VAN DE VELDE, D. (1998) : "Aimer, verbe intransitif", in *La transitivité*, Actes du colloque de Lille : *La transitivité*, novembre 1995, éd. A. ROUSSEAU, Presses Universitaires du Septentrion, pp. 441-469.
- 朝倉季雄 (1981) : 『フランス文法ノート』, 白水社。

—— (2002) : 『新フランス文法事典』, 白水社。

練尾 毅 (1990) : 「指示代名詞 **ça** の用法について」, 『アカデミア文学・語学編』,
第 48 号, pp. 33-59. 南山大学。

——大学院文学研究科博士課程後期課程——